

「使用済みの天ぷら油から作った燃料で発電せんですか？」と夏祭りの準備会で初めて提案したのは昨年のこと。植物や生ごみといった身近に眠る資源を見直すNPO活動をしているため、地元でも目に見える取り組みをしたかったのだ。すると、「ヨカよ」と青壮年部の部長さん。拍子抜けするほど簡単に決まった。

お祭りの当日。地区の人たちが使い終わった天ぷら油を持ち寄った。燃料をつくる機械に入れて約五時間。どうにか祭りの開始時間までには軽油の代わりとなる燃料ができあがった。できたての燃料を発電機に入れると、屋台の提灯に灯がともった。

私たち夫婦が住んでいたドイツでは、バイオディーゼル燃料(BDF)と呼ばれる軽油の代替燃料が急速に普及している。フィルターによって排ガスの問題を解決したディーゼル車は、燃費がよいことから乗用車としても人気が高

南阿蘇

吉田 愛梨

里の風

菜の花プロジェクト

い。
 ナタネ油からできるBDFは、石油のように枯渇することがない。免税によって国もBDFを奨励しているため、環境に対する意識が高いからというよりも、単に一番安いからという理由で需要が増えた。ヨーロッパでも減反に似た生産調整が行われているが、食用以外の作物なら栽培してもよいことになっている。燃料用のナタネを植えて、少しでも収入につなげようとされたのがそもそものきっかけだったという。



絵・有働 孝昭

日本でのBDFを利用する動きは、滋賀県で始まった。琵琶湖の水質汚染を防ぐために使用済みの天ぷら油を回収してリサイクル石けんをつくっていたが、油が余り始めた。そこでヒントにしたのがドイツのBDF。汚れを取った後、粘度を下げて燃料化するプラントが開発された。

現在はヨーロッパの規格にも通るほどの品質を誇るBDFも登場している。休耕田や耕作放棄地にナタネを植え、地元産のナタネ油として学校などで使った後、回収して公用車の燃料にするという一連の仕組みは、「菜の花プロジェクト」と名づけられた。

今年も地区の夏祭りではBDFを使って発電した。「一年きりで終わらせたくない」と、青壮年部が自主的に企画したものだ。打ち上げが終わる夜中過ぎまで、会場を明るく照らしてくれた。農業者が食料だけでなく、エネルギーまで生産する日も近いかもしれない。(おあしす米生産者、NPO九州バイオマスフォーラム理事 長)